
短篇創作集

宵山 芭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短篇創作集

【Nコード】

N6315G

【作者名】

宵山 苺子

【あらすじ】

短篇創作話集です。ジャンルは混沌、お題小説、リクエスト小説もございます。どこから読むもご自由に。

宴

風が生温く髪を撫ぜる。夜道は点在する街灯に照らされていて、薄ぼんやりと町並みが分かる程度だった。

月光に雲がかかり、黄色い光が淡く空を彩る。帰宅の途中、どこかの学校の土地なのであろう金網のフェンスが高く連なる広いグラウンドに通るかかった。グラウンドには桜が並び、今を盛りとばかり枝を撓^{たわ}ませていた。

にわかに、一陣の風。満開の桜の枝はささやかに揺れた。

ほーう

声がした。それは男のかん高い声で、風に混じって微かに流れてきた。

ほおー、う

何か叫んでいるようにも聞こえたし、歌っているようにも聞こえた。辺りを見回したが、人の姿は見あたらな。しかし、男の声は闇に紛れてグラウンドに響いている。

かぽおん。

かん。

かぽおん。

かん。

今度は音がした。昔、近くの神社で行われていた奉納の祭りの際に聞いたような音。あの楽器は何と呼んだのだったか。

かぽおん、かん。

ほおーう。

かぽん、かん。

ほーう。

声と音とは呼応し、不思議と神妙な雰囲気か辺りを支配した。

ほおー、う。

かあん。

一際強く音が鳴る。それに合わせ、桜はざわざわと強く枝を揺らした。まるで、声と音に反応して舞を舞っているようだった。

ひりひりひりひり……

遠くからか近くからか、笛の音が流れてきた。今度は笛の音に合わせて桜が舞った。枝がざわめき、擦れ合う数多の枝はしゃなりしやなりと花弁を落とす。

ひりひりひりひり……

ひらひらと、ゆらゆらと。桜は笛の音に合わせて散ってゆく。

舞う。

花びらが、枝が、桜が、風が。舞っている。

そうか、舞うとはこのことなのだ。

ひらひらと、ゆらゆらと。

無心にただひたすら揺れ動く美しさを、舞うと人々は表現したのだ。

桜の舞は美しかった。

それはさながら、天女の様だった。

ざんざんと舞い散る花びらはむしろ歓喜に満ちていて、それに加えて不思議な音達は妖しく枝葉を揺らしている。

ほーう。

かぽん。

ひりいひりいいい…

かぽおん。

ほーう。

ひりいひりいいい…

ほおーう。

ほおー、おう。

ほおーおううう…

ひと際強く声が聞こえた。同時に、ざむと再び突風が吹いた。

その風を最後にそれきり桜はぴくりとも動かない。町は、耳が痛いほどしんと静まり返った。

何だったのだろう、兎に角不可思議な体験だった。春先の夜風が体を冷やしてしまい、私は前を開けていたジャケットのボタンを一つとめた。

ほおーおう

帰り道を歩きだそうとした私に、呼び掛けるように声。ちらりと後ろを振り向くと、黄色い満月がぽっかりと夜空を照らしていた。

桜の下で逢いましょう。(前書き)

まる。さんからのお題「トランキライザー」で書きました。

桜の下で逢いましょう。

春の宵のことであつた。

夜桜がほろほろと月光に舞う。

白とも桃ともつかぬ色合いの仄かな花卉は、音もなくしづしづと地へ吞まれていった。

黒猫が一匹、桜の木の下でにゃあと鳴いた。どうやら私を案内してくれるらしい。

さも「付いてきなさい」と言わんばかりに私に背を向け、尾をゆらゆらとさせながら猫は闇に吞み込まれていった。

さてどうしたものか、と一人立ちすくんでいると、黒猫が消えた辺りの闇から

「にゃあ」

と声がした。

息を吞むほど美しい今宵は、人外とて浮かれるのであろう。私は、浮かれ鳥ならぬ浮かれ猫に誘われてみるのも面白い、と思って、自らを闇の中へ持っていった。

気が付くと、そこは公園のベンチであった。錆びたブランコの金具が、きいきいと音をたてていた。

こんな夜は、一人満月を愛でるのも良いだろう。私はベンチに腰を落とし、ぐうと背を伸ばし空を見上げた。

「にゃあん」

少し遠くから、猫の声が聞こえた。あの黒猫だろうか。どうやら私に話しかけているのではないようだった。

「あら、クロちゃん。今晚は。今日は一人でお散歩かしら？」

人の声がした。

穏やかな声であった。

公園の入り口を見ると、小さな老婆が先ほどの黒猫と戯れていた。

「今日は良い晩ねえ。お月様があんなにまん丸。」

「にゃお」

「あの丘の桜の木は、今頃綺麗に咲いてるかしらね。」

「にゃあお」

「…あの人も、何もあんなに早く逝かなくてもよかったのにねえ。あの約束だって、三回しか守らなかったじゃない。狡いひと。」

「にゃうん」

老婆は、まるで猫と会話するようにぼそぼそと喋り始めた。黒猫も、まるで老婆の言葉が分かっているかのように相槌を打つ。

「さあ、クロちゃん。私は用事があるから行かなくちゃ。」

そう言って、老婆はすつくと立ち上がって公園を後にした。

老婆が去ると、黒猫は、私に向かって

にゃおん

と鳴いた。

また付いてこいと言っているのだろう。

やれやれ、まだ月を十分に楽しんでいないのだが。

黒猫はもう一度強く、「にゃおん」と鳴いた。

黒猫に案内されるままに歩いてゆくと、先刻の、夜桜が美しい丘へと戻ってきてしまった。

ただ、先刻と違うのは、桜の木の下にあの老婆がいたことだ。

「今年も綺麗な桜ね…」

ぽつりと呟いた言葉は、独り言だろうか。老婆は私が来たことにも黒猫が来たことにも気が付いていない。

ぎゅう、と大木の桜にしがみついていたのだ。

「また、来年、来ますからね。……………陽介さん。」

老婆が私の名前を口にしたとき、私はようやく思い至った。

今日は、私の命日だったか。

妻とは、多恵とは20年前に死別した。早くに多恵を一人にさせることがとても悲しかった。

まあ、彼女のことだからもっと良い伴侶を探すだろうとは思っていた。娘もいたのだ。やがてきっと、私を失った寂しさも彼女なら乗り越えてくれるだろう。

多恵には、私より長い長い人生が待っているのだから。

およそ20年ぶりの再会なのだろうか。妻は、昔よりも遥かにやせ衰えて小さくなっていた。

多恵は私に背を向け、ただじっと桜に縋っている。

私はそっと彼女に近づいて、その小さく節樽立った右手に私の手を重ねた。その温かさに、私は寂しさと切なさがこみ上げる。

後ろからぎゅうと彼女を抱きしめ、そっと囁くように、呟くように、多恵の耳に言葉を残した。

四回目の彼女との約束を果たした私は、惜しみながら彼女の元を離れ、
月の光に身を委ね、融けて消えていった。

多恵が桜を抱きしめながら陽介との思い出にふけっていたときである。一瞬、右手と背中に温もりを感じた。懐かしい温かさであった。

驚いて、目をうつすらと開けようとしたとき。

風に揺らめき舞い落ちる花卉のようにほんの僅か、せせらぎのような声が聞こえた。

「貴方に会えて、僕は幸せでした。」

陽介だ、と思った瞬間、温もりも気配も、何もかもが消えてしまった。

かさり。

音がした。

振り向けば、黒猫が緑の双眸をこちらに向けている。

「クロちゃん……。ね、聞いて。今ね、一瞬だけね、私、陽介さんに会えたかもしれないの。」

黒猫は、得たり、とばかりに

にゃあお

と一声、短く鳴いた。

e n d.

蛍巡りの夜（前書き）

まる。さんリクエスト「ショートでライトでストライクな小説」で
書きました。

蜚巡りの夜

それは、噎せ返る程の青い草の香り。夏の空気だった。

カナカナと、遠くで蝸《ひぐらし》が鳴いている。日は傾いているのに、一向に気温は下がった気配を感じさせない。そんな、茹だるような夏の夕暮れだった。

久方ぶりの休暇だ。ここのところ仕事に忙殺さる、ろくに帰宅すらしていない。

仕方のないことだとは思っている。今が昇進のチャンスなのだ。あの契約さえ結ぶことが出来れば、会社の中の自分の地位は揺るぎないものになるのだ。

近くのコンビニで買ったビールを、通り掛かった公園の隅にあるベンチで飲むことにした。どっかとベンチに腰を落とし、ビールを袋から取り出す。

にゃあ。

鳴き声がした。

足下を見ると、小さな黒猫がそこに居た。野良なのか。しかし妙に人に懐く。

買ってきたつまみの中で、これは大丈夫だろうと思った魚肉加工品をちぎって猫に放ってやった。猫は、それを追いかけて走っていた。

ビール缶は冷たく、水滴が付いていた。プシツという音でプルタブを起こすと、握っていた缶が僅かばかり凹む。

ぐいっと一口を喉で鳴らすと、炭酸のぱちぱちという刺激が胃壁まで広がった。

にゃあうん

また、猫の鳴き声。

猫を探そうかときよろきよろすると、ふわりと心地よい浮遊感。いつもより早い酔いのまわりに多少驚きながら足下を見ると、案の定そこにはさっきの黒猫がいた。

またつまみの一部をちぎって放ると、猫は脱兎のごとく駆けだしていく。

目を閉じると、どこかで水音がする。辺りが静か過ぎるのか、アルコールで感覚が鋭くなったのか。

水音は、流れる小川の音に似ていた。

にゃあうん

少し遠くで猫が鳴いている。見ると、緑の双眸がぱちくりとこちらを見ていた。

もうすっかり周りは夜の気配で、黒猫はその背景に同化していた。そして、異様に光る二つの目のだけが際立っていた。

ぼんやりと、猫の目を見る。

夏の匂い。

虫の声。

むっとする風。

そして、緑色に光る、それ。

何故だか、懐かしい感情が蘇ってくる。

さらさらという水音。

ああ、

あれは蛍か。

田舎では、この季節に蛍が舞っていた。一匹二匹ではない。それはもう、無数の星の様に。

にゃあお

猫が鳴いた。それはまた足下にいた。ごろごろと人懐っこく、足に擦り寄る。頭をなぜようと手を出すと、然しするっと逃げていった。

田舎の蛍も、よくこのように逃げたものだ。猫はにゃお、と短く鳴いて、奥の茂みに入っていた。

逃げられたか、と少し寂しく思い、またビールを飲み始める。すると、今度は茂みの中から「やあお、やあ」と声がした。

不思議とその鳴き声に呼ばれた気がして、荷物を持って普段は入らない公園の奥に足を進めると、そこには噴水があった。

水音の正体はこれか。

噴水の近くにもベンチがあったので、そこに座ってビールを飲む。背伸びをして夜空を仰ぎ見た。

空は、満天の星だった。

「やあ。」

猫を見ると、相変わらず緑の光を灯らせた目。ああ、この星の中、本当にあれは蛍のようだ。

そのとき、ふっと何かが顔を横切った。

ぼんやりと光る、虫。

まさか、と思いながら光を目で追う。

それは、紛れもない蛍だった。

そんな馬鹿な。飲み過ぎたのか。

思っている間に、ひらり、ひらりと蛍は増える。

ひとつ、ふたつ、みっつ……

そして、もう数え切れないほどの蛍が公園を飛び交うようになった。夜空と公園に区切りがない。まるで、ここが星空の一部になったようだった。

「やああ。」

猫が鳴いた。黒猫だ。

ベンチに腰掛けたすぐ側に、猫。心無しか、彼は笑っているように見えた。

酔っているのか、何なのか……。

とにかく、今の状態が心地よい。

少しくらい何もせずに星たちと戯れるのも良いだろう。

何せ、明日は久方ぶりの休暇なのだから…。

うにゃあと心の声に返事をした猫を横目に、思う。

今年の盆は田舎へ帰ろうか。

ここよりもっと強い草の匂いと、くっきりした星と、蛭に会いに行こう。

家の縁側で風鈴の音を聞きながら西瓜をかじるのも悪くない。

親と晩酌のビール、愚痴を肴に語り合うのも良いだろう。

そうだ、あのちっぽけな夏祭りにでも顔を出してやろうか。級友達とも、ひよっとしたら会えるかもしれない。

そう思ったら、明後日からの仕事が上手くいきそうな気がして、少しだけ肩が軽くなった。

黒猫は、その様子を見る。

彼はやっぱり、にゃあと鳴くのみだった。

end.

ゆづるはの、（前書き）

わかさまリクエスト「心あたたまるお話」で書きました。

ゆづるはの、

落葉が甚だしい。はらはらと地面へ落ちる讓葉は、悲鳴を上げるでもなく枝と別れを惜しむでもなく、ただ静かに降り積もる。

一時期あんなに盛りを迎えた深緑の大きい葉は、今はもう見る影もなく茶色にしわがれていた。庭の讓葉をなんとなく見ていた節子は、そのくすんだ落葉に何故か母を思い浮かべた。

盆に帰省したときの事である。母はいつものように割烹着を着て台所に立っていた。

ことごと、ことごとと鍋の音がゆっくりで、節子は「ああ、実家に帰ってきたのだ」とのんびり思い、茶の間で足を伸ばしていた。

「節子お？」

背中越しに母の声が聞こえる。

「なあに、お母さん」

ことごと、と鍋が吹いている。

「ちょっと今手が放せないから、お鍋見て頂戴」

「うん、わかった」

「早く早く」

急いで立ち上がって調理場に向かうと、そこには母の姿があった。

どこであてたんだか、流行の欠片も無いくるくるパーマが小刻みに揺れていた。

「…………お母さん。」

「ん、なによ。そんなとこで止まってないで早くお鍋見て頂戴」

節子は、久しぶりに会った母に「小さくなったね」という言葉を飲み込んだ。

昔は仁王像みたいにとっしりした母だったのにな、と思いながら鍋の火加減を調節した。

隣に立つ母は、目尻や頬に皺が目立っていて、黒いシミが増えていた。とんとんとん、とりズム良く刻まれるまな板の上の葱の先を見ると、以前よりずっとずっと骨ばった手があった。

「節子、聞いてよ。」

そう言っ下らない世間話を始める母の声は変わらない。それでも近くで見ると、随分年老いたのだなと感じられる母だった。

ああ、もう母も若くはないのだな。節子は実家の少し脂で汚れた床を見つめてそう思った。

そう思ったら、少しだけ泣きそうになり目が滲んだ。

譲葉を見ていた節子は、そうだ、とふと思い出した。

多分筆笥の奥底に眠っているであろう、緑の着物。結婚する時に母から譲り受けたのである。

あんたも一端に人の妻なんだから、こういう着物を着て少しは落ち着きなさいよ。

そう言って渡されたのは、母がよく授業参観日などに着て来た着物だった。目立つ色だったので、卒業式にまで着て来た母の事を同級生にからかわれたりもした。当時は、からかわれるので母がそれを着るのを嫌がったけれども、今思えばとても母に似合っているものだった。

おばさんくさいし流行遅れだから、なんて言って今まで着ていなかったけれど。今ならもう着ても良いかな、と思えてきた。

いそいそと押入に向かい、筆笥から着物を引っ張り出した。ナフタリンの香りがぷんと鼻につく。

久しぶりに見るそれは、記憶の中よりも鮮やかな深緑だった。

「着付けの仕方、まだ分かんないや…」

着物に片方の袖を通して、節子はぼつりとつぶやいた。

そうして、節子はおもむろに携帯電話をポケットから取り出す。夫に電話する為である。

七回目のコールの後、夫の祐司の低い声がいい、と言った。

「もしもし、あたし。ごめんね仕事中に。……………うん。あのね、今日病院に行ってきたんだけど。うん。……………私、子供が出来たの。八週目なんだって。」

電話の向こうで祐司は、そうか、やったねと言っていた。笑顔が想像できる程明るい声だった。今日は残業せずに帰ってくるらしい。

さて、母にも電話しなければ。母は一体どんな反応を示してくれるだろう。喜んでくれるといい。最近気にしがちな皺も気にせずに、顔をくしゃくしゃにして笑ってくれたら、いい。

「…あんたが幼稚園入る前には、一人でこの着物を着れるようになるからね。」

ぽん、と左手でお腹を叩くと、心なしか優しい音が聞こえてきた。そこで節子は、携帯電話の向こうにある母の姿を想い、通話ボタン

を押した。

「お母さん。お母さんはおばあちゃんになるよ。私妊娠したから。……うん、それでね。着物の着付け方教えて欲しいんだ。え？うん、譲葉だからね。……ふふ。分からないでしょ。いいんだ。今週末、そっちに帰るね。」

庭の譲葉が、またひとつはらりと落ちた。節子はそれを、新しい世代へとバトンを繋ぐリレーなのだな、と思った。

end.

ワクラバ（前書き）

S氏リクエスト「ワクラバ」で書きました。

ワクラバ

今年の夏の、名残なのだ。

三日しか書いていない日記の最後のページに挟んであったひとひらの葉。

じりじりと太陽が肌を焦がす昼に、机に置いた日記帳からはらりと零れ出た。

夏に見つけた、黄色い葉っぱ。

誰が見ても病気の葉だった。

「知ってる。わくらばって言うんだよ。」

そう彼女が言ったのは遠い昔の样でもあるのに、昨日の事みたいだ。

「ビョーキの葉っぱなんだ。」

今年の酷く暑い夏、哲也は入院したのだった。足を骨折して全治一週間。

哲也は相部屋の窓際で一人静かに本を読んでいた。

うとうとと瞼を閉じかけていると、本にはらりと黄色い何かが舞い落ちた。

変色した桜の葉だ。

夏の桜は深緑が鮮やかだ。それなのに、元氣もなくなだしわがれたこの葉も確かに桜だった。

例えば哲也に父がいたり、他の男子に比べて体が細く色白でなかったのなら、哲也はそれを窓の外に放って土に還してやっただろう。しかし、哲也は読んでいた本のしおりに使った。何となく、本当に何となくこのままさようならをするのが苦しかったのだ。

「知ってる。わくらばって言うんだよ。」

誰もいなかった筈の哲也のベッド脇から、少女の声がした。

「ビョーキの葉っぱなんだ。」

黒い髪を二つに結んだ少女が立ち、哲也を見ていた。

「だから、早くに枝を離れたんだね。」

哲也はそう言った。この少女が誰であるとか、何処から来たとか、そういう質問をする前に答えたくなった。

「ビョーキだから、さようならをするんだ。」

哲也は、殆ど自分に言い聞かせるような心地で言う。

しかし少女は首を横に振った。

「ううん。わくらばには二つの意味があるの。一つは 病気の葉っぱだけど、もう一つは木の若葉。」

そう言って少女は頬にかかるひと房の髪を耳に掬い上げた。

相部屋の老人をお見舞いに來たのだ、と言った彼女は葵と名乗った。

「しっかりと緑色に育たない葉っぱがわくらばなの？」

哲也は、葵にそう問う。

葵は不思議そうに首を傾げる。

「さあ。」

そうして葵は病室から去っていった。

哲也はベッドの横から一冊のノートを取り出した。

哲也が毎日つけている日記だ。残りが少ないから、もう新しいものにしようと思っている。

ぱらぱらとページをめくると、級友との人間関係に関する苦悩や愚痴や様々な負の感情が羅列されているのが分かった。

哲也は日記帳の最後に文字を書いた。

「わくらば

病気の葉っぱ。」

次の日も葵は病室に現れた。今度は哲也に話しかける事なく、気難しそうな老人と楽しそうに談笑していた。

哲也は一人本を読み、目が疲れると外の桜を見る。

桜の葉は今にもぷりぷりと弾みそうな程、太陽の光を真っ向から浴びて輝いていた。

こちらは太陽の日もろくに当たらない、日陰の室内だというのに。

哲也は早く大人になりたかった。

級友たちは、哲也の事を快く思っていないようだったから。

だから、学校など早く卒業して大人になりたかった。

大人になる為には、あと一年と半年待てば良い。

だから、それまでは辛抱強くじっとしていればいいのだ。

「何読んでるの？」

葵が話しかけてきた。もう親しい仲のつもりらしい。

「本。」

哲也がふいと窓の方を向くと、葵はふうん、と納得した。

「うちのおじいちゃんもね、本が好きなの。」

葵は哲也の冷たい素振りも気にせず話し始める。

「凄いのよ。おじいちゃんの読んでない本なんてこの世に無いくらい。ずうっと昔に大学で偉い教授をしてたから、本当にお話も面白いの。」

「ふうん。」

「でもね、ある論文を書いたら怒られちゃって。それで、大学を辞めさせられちゃったの。」

葵は声を殺して、本当に残念そうに言う。

「怒られた？」

「うん。おじいちゃんより偉い人を批判しちゃ、駄目なんだって。」
哲也はその話に吐き気がした。大学の教授より偉い人ですらも、

哲也の級友と同じ事をするのだ。

「おじいさんも、わくらば？」

葵はそう問う哲也にきつと怒りの目を向けた。

「おじいちゃんは、ビョーキじゃない！」

葵は哲也の膝に掛けてある布団をぎゅうと握りしめた。

「本当にビョーキじゃなくても、緑色の葉っぱ以外はわくらばじゃないか。」

哲也はそんな葵に静かな声で語りかける。

幼くても、細すぎても、色が白くても、緑色の綺麗な葉でないのなら、皆、わくらばなのだ。

哲也は本を読むふりをした。葵は何か言いたそうにしたけれど、黙って哲也のベッドから離れた。

その日、学校を離れてから終ぞ起こらなかった吐き気が哲也を襲った。

哲也の吐き気の対処法は日記だった。

日記に書きたい事を書きたいだけ書く。殆どは気持ちの悪い毒の羅列なのだが、書けば書くだけ自分から紙へ毒が排出されるようである。安心する。

だから今日の日記も毒で埋め尽くされる筈だ。哲也は消灯時間間に、誰もいない談話室に向かった。新しく買ったノートを携えて一番隅の椅子に座る。

「ねえ、聞いた？ 高橋さんの。」

哲也がノートに何かを書こうとした時、ぼそぼそと看護師の声が聞こえてきた。

「ええ。あの可愛いお孫さんしかお見舞いに来ない患者さんでしょ。」

高橋というのは、葵とその祖父の苗字だった。

「息子夫婦も余りお見舞いに来ないし、困ったわ。大事な用事があるのに。お孫さんから伝言してもらうのも、ねえ。」

「そうね、あんな小さな子供に任せっきりで。何しているのかしら。」

「それが親子の仲が悪いとか。」

「それにしたって末期癌の親を見捨てるみたいなやり方！もう、飽きれちゃうわ。」

哲也は看護師の話聞きながら、吐き気を増やしていった。増やした吐き気が日記に埋まる。何ページも何ページも埋まっていく。それでも、今日哲也の吐き気が消える事は無かった。

気持ちの悪いまま朝を迎えた。

哲也は食事を受け付けないままぐったりと午前を過ごした。

昨日まで読んでいた本も開いていたが読む気になれず、手もとの黄色い葉を玩ぶばかりだった。

「本、読んでるの？」

葵はいつもそつとやってくる。そつとやってきて勝手に喋っている。

哲也は今日、誰とも話したい気分では無かった。

ふいと葵から顔をそむけて目を閉じる。

「ねえ。大人ってキモチワルイね。」

葵は構わず喋る。彼女はもうやら石よりましな話相手が欲しかった様だ。

「おじいちゃん、何も悪いことしてないよ。ただ意見書いただけなのに、悪者扱いされちゃって。おじいちゃんの味方もいなくなっちゃって。おじいちゃん寂しいのに、何でお父さんもお母さんも分かってくれないのかなあ。何でおじいちゃんは、お父さんに怒られなくちゃならないのかなあ。」

大人って、気持ち悪い。葵はまたそう呟いた。

「何で大人は、緑の葉っぱじゃなきゃ、いけないの。」

病室はしんとしていた。当然だ。哲也と葵以外の人間がこの病室にいないのだから。

「あたし、大人になりたくない。わくらばのままでいたいわ。」

葵はぽつりと呟いた。きっと彼女は、若い新芽のままでいたいのだろう。大人になりたくないのだろう。薄汚れた大人になんて。

「僕は、早く大人になりたい。」

哲也はきっぱりとそう言った。その言葉は、数瞬の間沈黙の海にどろりと消えてしまったが。

「何で？」

「大人になれば、少なくとも、仲間が増える。」

「お友達、欲しいの？」

「友達じゃない。仲間が欲しい。」

「どんな仲間？」

「普通の、仲間。」

きつと病気を持った、変わった色の葉に仲間なんて出来るはずないのだろうけど。哲也は本音を喉の奥にしまい込んだ。

その夜も吐き気で眠れなかった。消灯時間を過ぎた談話室は明るく、そこでいつものように日記を書く。一ページ目を書き終えると、俄かに辺りが騒がしくなった。

良く分からない単語と電子音が響く。血圧がどうのとか、心拍数がどうのとか、家族に連絡を、とか。

もしやと思って少しだけ自分の病室を覗くと、確かにその部屋が騒がしいのだった。

あの病室には自分と高橋老人だけ。

ああ、そうか。

もう一度椅子に座りなおした哲也は目を閉じる。

脳裏に、葵の表情豊かな泣き顔が浮かんだ。

次の日、高橋老人は病室にいなかった。

相部屋の広い部屋に、哲也は一人取り残される。

葵とももう、会わないのだろうなと思った。そうすると凄く楽し

い何かが失われたような気がしてつまらなくなった。

夏も深まっている。秋になれば次第に色づいていくのだろう桜の木も、まだまだ青く茂っている。

早く、この鬱陶しい季節をやり過ごしたい。

早く、早く、早く。

哲也は、ふと何かを思いついた。

哲也にしては珍しい、素敵な思いつきだったかもしれない。

その言葉を書きとどめようと日記帳に日付を書いた時に、いつもの様にそつと葵がやってきた。

「おじいちゃん、死んだわ。」

静かな声だった。

想像していたよりもずっと、深く沈んだ声だった。

「末期癌だったの、知らなかったの。子どもだからって、知らなかったの。あたし、子どもだから。」

「……わくらばで、いたいんじゃないかったの。」

哲也は葵の顔を初めてじっと見ながら、そう言った。

「だって！お父さんもお母さんも知ってたのよ？あたしだけ知らないで、にこにこ笑ってお話して、知らないからって……大人ってキモチワルイのに、大人じゃないと子どものままだし、大人になりたくないのに、子どもじゃ嫌なの。駄目なの。大切な人と笑えないの。おじいちゃんとさようなら出来なかったの。子どもだから、」

「わくらばって、」

葵の嘆きに覆いかぶさるように哲也は喋った。

「きつと気が早く成長する葉っぱのことなんだよ。」

哲也は涙さえ見せない無表情な葵の手を握った。

「ねえ、君はわくらばなんだろ。わくらばなら、わくらばらしく、成長してみないか？」

「あたし、だって、大人になんか…！」

「別に、緑の葉っぱが大人なんじゃない。緑の葉っぱじゃなくても大人は大人だ。」

哲也はそう言って、力を込めて葵を引き寄せた。すぐにバランスを崩した葵は、哲也の胸に転げこむ。葵のしつとりと優しい匂いの髪に胸の苦しさを感じながら、哲也は葵を抱きしめた。

「少し、早く成長したいだけなんだよ。」

哲也は葵にも自分にも言い聞かせるように呟いた。

今年の夏は、昨年ほど暑くない。

それでも向日葵は咲き誇り入道雲は白く、シャツは汗まみれになるばかりだった。

哲也は自室の机に日記を置いた。

三日程しか使わなかった日記帳は、それでも哲也の大切な思い出の一つとなっていた。

学校を卒業するまであと半年も無いのだけれども、卒業を指折り心待ちにする事は少なくなった。

荷物を鞆に詰め込んだ哲也は部屋を後にした。出かける先は、かつて大学教授だった老人の書斎。広くて本がたくさんある涼しいその書斎は図書館と変わりが無い。

ただ、一つだけ。

その書斎の現在の主である少女が、麦茶を用意して待っているのだ。

昨年の夏、あの日無闇に大人になろうと足掻いたわくらば達は、

ひっそりと大人になる準備をしていた。

e
n
d.

初恋でした。(前書き)

梨央さんリクエスト「ほんのり淡いグロテスク」で書きました。
注意！残酷な描写が含まれております！

初恋でした。

サモトラケのニケにしろ、デパートの洋服売り場にあるトルソにしろ、躯幹に手足と頭が付属していないというのは非常に美しい。何故なら、それは人間を超えた存在だからだ。言い過ぎだと思われるかもしれないが、これはある種の真実だ。

簡略美、とでもいうのだろうか。余分なものを削っていく美しさ。それは人間である内には到底出来ない完全なる美なのだ。

常々僕は不思議に思っていた。何故「五体満足」という言葉があるのだろうか。

五体、とは、おそらく、右手、左手、右足、左足、頭の事だろうと思うのだが、何故それらに「体」という文字が使われるのだ。手足や頭部が独立して体となるのはなり得ない、つまり体のほんの一部のパーツだ。

「体」とは即ち「躯幹」である。むしろ世間で言うところの五体を取り除いた体の中心こそが体たるに相応しいのだ。

僕は夕暮れの帰り道、とぼとぼ歩いて家に帰っていた。

路地に差し掛かった時、前方から車のヘッドライトが攻撃的に光を叩きつけてきた。目を細めて前を向く。

すると、光の中に黒いシルエットが浮かび上がった。女性のシルエットだ。

それも、かなり細い。

彼女は携帯電話を耳に当て、体から細長く突き出た足を前後に動かしてこちらに向かってきた。細い脚だ。腕も細い。

そうだと分かるのは、彼女が秋であるにも関わらず露出の多い格好をしていたからだ。

車が横切って、路地は暗くなった。

網膜に焼きついた光が余計に辺りを暗くした。

かつ、かつというヒールの音が近づいて来るかと思ったが、途中で足音が消えた。

目を凝らすと、数メートル先の薄暗い電灯の下、彼女が自分の踵を抑えているのが分かった。

どうやら足に何かがあったみたいだ。

彼女はブーツを履いていた。細身のロングブーツだ。体から延びた足を飾る装飾品。

靴の踵に何かあったのか。

それにしても細い脚だ。膝がまるきり骨の形だ。

本当に折れてしまうんじゃないだろうか。

本当に折れるかどうか試そうと思って、僕は彼女を殴りつけた。

気絶させて、家と家の隙間に運び込み、また顔を殴った。

声は出されなかった。素手で殴ったら逃げられるかな、と思って、民家にあった人の頭くらいの大きさの石を使ったのが良かった。

それから、彼女の足に石を落としてみた。膝を狙った。

鈍い音がしたけれど、折れることは無かった。案外人間の足というのは丈夫だった。

コンクリにころりと横たわる彼女を見て、何だか無性に綺麗だ、と思った。

美術の教科書に出てくる女のひとよりも美しいと思った。

でも、体に付属している諸々は要らないな、と感じた。

服にしろ、手足にしろ、頭にしろ。薄着をしているからこそ分かる彼女の体の形は、乳房の形やウエストラインが完璧だった。

それだけに、付属する不細工な諸々は要らない。完璧な形だけが欲しいと思う。

手始めに彼女の服を脱がせた。

簡単だった。

下着みたいなキャミソールを切り裂くだけで良い。つるつるした手触りだったけれど、手持ちのカッターナイフで難なく服は切れた。

しかし、さぞかしきれいな体をしているだろうと思った彼女の身体に僕は興醒めした。

彼女の体には無数の青痣や切り傷、火傷跡が残っていたからだ。

決して服を着ている状態では見えない所に、執拗に、何度も何度も付けられた傷。これだけでもう完璧では無くなった。

「驚いた？」

暗がりから声がした。彼女が声を発したようだった。

「あたし、こんなの慣れてるからこれくらいじゃ気絶しないのよね。貴方が何するか興味あったからじっとしてただけど、やっぱり襲うのが目的だった訳？」

酷く明るい声だった。僕はどもりながら、何とか、足を折ってみ

たかったという旨を伝えた。

「あっは、あたし、もう何回も足折られてるから骨が丈夫になってんのよ。残念だったわね。ね、そしたら何で脱がせたの？」

体が見たかった。君を躯幹にしたかった。
そう言った。

「クカン？ああ、手足とか頭とか無い奴ね。でも残念。御免ね。あたし、もう先約があるんだ。」

そうして彼女は「ばいばい」と言って、石を落としていない足と手を器用に使って立ち上がる。

少しリズムの狂ったかつ、かつというヒールの音を響かせて歩いて行った。

やはり、彼女の体は綺麗だ、と思った。

end.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6315g/>

短篇創作集

2010年10月9日13時38分発行